

# 『行動の構造』における 「ゲシュタルト」概念について

猪股無限

本稿ではモーリス・メルロ＝ポンティの初期の著作である『行動の構造』における「forme」および「ゲシュタルト」概念の用法に着目し、その意義を考察する。

ゲシュタルト（Gestalt, forme）とは「形」、「形態」、「形式」などを意味する語であり、とりわけゲシュタルト心理学においては「その部分に還元されえない全体」を意味する。この「ゲシュタルト」概念が『行動の構造』において最重要の概念であることは疑いようもないが、それは「構造」概念と並べて使用され、しばしば同一視され、「意味」や「価値」概念との関わりにおいて理解される<sup>ii</sup>。そもそも「形」や「形態」という言葉を定義することは容易ではないが、この「部分に還元されえない全体」という定義は明らかに一般的にいうところの感覚的な「形」の意味を越えて出ている。しかしなぜ「ゲシュタルト」だったのだろうか。

この「ゲシュタルト」概念について、メルロ＝ポンティは『行動の構造』において「部分に還元されえない全体」という以上にその「構造」としての特性に重点を置き、意識と自然との関係を再検討している。本稿では、この「構造」として「ゲシュタルト」というカテゴリーを導入することによって、メルロ＝ポンティは「形式」と「内容」との二元論に一旦迂回した形で応答しているという仮説のもと、『行動の構造』を読み解いてみたい。

そのため、第一節では『行動の構造』における「ゲシュタルト」概念の位置付けを確認し、その用法を大まかに分類することでその含意を検討する。そして第二節では「高等な行動」の章における「癒合的形態」、「可換的形態」、「象徴的形態」といった区分を検討し、なぜそれが「形態（ゲシュタルト）」と呼ばれうるのかを検討する。そしてまとめとして、「ゲシュタルト」が「形式」の問題系へも接続するという点について考察していく。

一見すると「ゲシュタルト」概念の導入はメルロ＝ポンティが現象学者としてゲシュタルト心理学を評価する、というようにも読める記述も見られるのだが、Th・F・Geraets が明らかにしたところによれば、むしろ逆で、メルロ＝ポンティは現象学に出会う以前にゲシュタルト心理学の重要性に注目していた<sup>iii</sup>。しかし事情はやや込み入っている。現象学、とりわけ初期のフッサールが「意識を自然化している」<sup>iv</sup>とゲシュタルト心理学を強く批判していることに対して、メルロ＝ポンティはそうしたフッサールの批判に対して、ゲシュタルト心理学の試みが「価値」や「意味」といった概念の復権を果たしていることから、それが「志向性の理念に基づい

た心理学」だとして擁護している。メルロ＝ポンティと現象学との関係性を考える上で重要なことは、R.Barbaras が述べるように、この「ゲシュタルト」の概念であり、この概念によって彼はフッサールと主知主義の問題を解決しようとしたのである<sup>9)</sup>。しかしゲシュタルト心理学にはただ賛成するという立場でもなく、とりわけケーラーやコフカといった論者たちを中心に、『行動の構造』から晩年の研究ノートに至るまで、随所でその理論の長短を指摘し続けてきた。

forme（あるいはform）という概念は、「形式」やとりわけ哲学の文脈で「形相」を意味する。このことは現象学において厄介な問題を孕んでおり、とりわけフッサールにおける「形相」の問題は、forme という言葉を用いる限りついて回るものであり、「形相的還元」という現象学の根本的な方法論にもかかるものである。それはメルロ＝ポンティが依拠するフッサールが後期の発生的現象学だとしても、容易に避けて通れるものではない。こうした問題は晩年の研究ノートにおいて、「ゲシュタルト」概念を本質論の観点からやり直そうとしていたことから、彼の問題意識を伺うことができる。

そうした事情を踏まえた上で本稿では、『行動の構造』における「ゲシュタルト」および「forme」概念の用法を整理することで、メルロ＝ポンティがゲシュタルト心理学から受け継いだもの、ゲシュタルト心理学を批判し「ゲシュタルト」の概念に含意させたものを明らかにすることで、この概念の射程について改めて考えてみたい。

## 1. 「ゲシュタルト」概念の用法

『行動の構造』の大まかな議論としては、ゲシュタルト心理学を援用しつつ、「行動」の概念の検討を通じて、要素主義、つまりは生理学的あるいは心理学的原子論を批判することで、意識と自然との関係を理解することが目的とされている。ここでいう「自然」とは、差し当たり「互いに外的で、因果の諸関係によって結ばれた多様な出来事」<sup>10)</sup>と定義されている。つまり出発点として、意識に外的なものとしての自然は設定されるが、「行動」の概念を検討することによって、「外的に観察可能な行動すらも純粋に生理学的・物理学的な水準では捉えることができ」ず、その結果として「意識と自然の関係という、より根本的な存在論的問題を再考するように促される」<sup>11)</sup>ことになる。ここで「行動」から出発するというのは、それが「心的なもの」と「生理的のもの」との古典的区別に対して中立であり、したがってそういった区別を改めて定義し直す機会をわれわれに与える」<sup>12)</sup>からである。

『行動の構造』では表題の通り、行動の「構造」ないし「ゲシュタルト」といった概念がゲシュタルト心理学を参照しつつ検討されることになる。両者は概して類似した概念として用いられている。そこでまず本節では『行動の構造』の要となる「ゲシュタルト」の概念について、

その用いられ方をいくつか検討することで分類を試みる。ただしそれらは区分というよりも、それぞれの議論における力点の違いであり、厳密に使い分けられているわけではない。

### 1-1 部分に還元されえない全体

「ゲシュタルト」の第一義として挙げられるものは、「部分に還元されえない全体」という定義である。古典反射学説に則れば、刺激は恒常的な原因の資格をもち、その刺激が原因となって神経系が働き、反応および行動を起こしている。むしろ、反応に対しての原因となるまで細分化されたものが刺激であると言い換えることもできるだろう。そこでは単純な反射だけが扱われるのではなく、「反射の結合」といった複合的な事象も扱われていたが、複雑な反応であっても解明が進めばより単純な反射の法則に還元しうるだろう、という展望のもとでのことだった。例えば人間の膝蓋骨の下に衝撃を与えると反射行動を起こす、というのは知られているが、もしその脚が組まれた状態であれば伸展反応が起こり、力を抜いて伸ばしているならば屈曲反応が起こる<sup>24</sup>。古典反射学説においてはあらかじめ決定された反射弓（神経系の経路）が仮定されているために、その条件に合わない場合の補助仮説を付け加えざるをえない。しかし別な事例でも見ていくように、ゲシュタルト心理学ではこうした事態を、有機体の全体像が末端器官の状態を考慮にいれつつ屈筋と伸筋の間に興奮を「再配分する」というように説明し、神経系を部分に分けるのではなく、全体として捉えている。

十全な刺激とは、それだけで有機体と無関係に決められるものではない。それは物理学的事象ではなく、生理学的ないし生物学的事象である。ある反射的反応の発動を余儀なくさせるものは、物理-化学的動因ではなく、興奮のあるゲシュタルトであり、物理-化学的動因はその形態の原因というよりもむしろ機会なのである。[...] 興奮自体がすでに反応であり、それは外から有機体に輸入された結果ではなく、有機体自身の活動の最初の発現なのである<sup>25</sup>。

ここで「刺激」という概念をとってみても、それが機械的かつ一義的に決定できず、有機体の活動の「原因」なのでもなく、主体にとっての「価値」や「意味」として与えられるものであるということが指摘される。ここでは、神経系の興奮の結果として反応が生じるのではなく、観察可能な形で刺激に対してある一定の全体として組織化された神経系の興奮は既に反応なのである。

### 1-2 構造、移調可能な全体

まずはじめに「ゲシュタルト」は要素主義に対抗しうる全体性として提示されたが、それが

「全体」としてまとまるためには組織化されたものでなくてはならない。ゲシュタルトは全体であると同時に「構造」を具えているのである。

刺激という概念は、有機体を受容器の上に場所的・時間的に散らばっている興奮を集め、そしてリズムとか形とか強度の割合など、要するに局所的刺激の全体的ゲシュタルト（*la forme d'ensemble*）という理念的存在に身体的存在を与えようとする有機体の根源的な活動に関わっている<sup>xxx</sup>。

この箇所でゲシュタルトをただ「全体性」と解してしまえば、「全体的全体性」となってしまう、同語反復となってしまう。ここで「ゲシュタルト」ではなく「形態」の訳語を採用したところで事態はあまり解決したとはいえない。具体例として、「ゲシュタルト」は一般的な意味での「形」をも意味するので、その点でも既にやや重複する面はあるものの、リズムや強度の割合などが例として挙げられている。解釈のために上記箇所の続きを引用したい。

同じ部分的刺激もさまざまな結果を引き起こしうるし、また同じ神経要素も質的に違った仕方でも機能しうるのであって、それは刺激の布置（*constellation*）や、またその布置が非連続的な感覚神経終末を越えて引き起こす練り上げによる規定に沿ってなされるのである<sup>xxx</sup>。

ここで「布置」という概念に表されるように、要素間の配列、順序、つまりはそれらの関係性が問題となっているということがわかる。ただ一つの全体であればいいということでもない。ある全体がどのような意味で別な全体と区別されるのか、それはただ構成要素を取り出して比較し、その量的な違いに目を向けても明確になるものではなく、それらの要素が全体の中で機能的にどのような働きをしているかという関係性に目が向けられるべきなのである。リズムを例にとってみれば、リズムとは一つの音のみで規定できるものではない。それは二つ以上の音があってこそ成り立つものである。しかしただ音が二つあれば良いというものでもなく、それらが全体の中で有機的に結びつき、継起的に生じることが重要である。確かに音一つ一つは局所的な刺激なのだが、各音は配列されることによって具体的なまとまりとなる。そしてこのまとまりの組織化こそが『行動の構造』の重要な論点となっている。そして諸要素の関係性こそがゲシュタルトであるということは、同時にゲシュタルトが自然的世界における事物のようなものではなく、それが一つの理念であるということの意味している。

また、この構造としてのまとまりを持つということでもう一つ重要なことは、エーレンフェルスを引いてメルロ＝ポンティが指摘するように、それが「移調可能な全体」だということだ

ある。「移調可能な全体」について考える際に、メルロ＝ポンティは「ゲシュタルト」をとりわけ「物理的系」に絞ってそれを指摘する。これらは、「孤立した諸部分があつた特性の総和とは異なる特性をもった全体的過程として——より正しくは、その諸「部分」を一つ一つ比較すれば、それらは絶対的な大きさにおいて異なっているにもかかわらず、全体としてみれば相互に区別できない全体的過程」として定義される。これは反対に、「部分がすべて相互に同じ関係を保ちながら変化する場合、系の特性もそのまま維持される」場合、それはゲシュタルトだということでもある<sup>xvi</sup>。

### 1-3 平衡状態

ゲシュタルトは構造を有し、その布置によってその意味を現すものだが、この構造の内部において諸要素は互いを規定しあい、その力関係は平衡状態に置かれている。

全体から切り離された各部分に当てはまるような法則はいっさいありえず、また各ベクトルの大きさや方向は他のすべてのベクトルによって決定されるといった平衡状態ないし一定した変化の状態にある諸力の全体として、定義されていたのである。したがってゲシュタルトにおいては、各局所的变化は、諸力の関係の一定性を保証すべき力の再配分（*une redistribution des forces*）となって現れるのであり、そして物理的実在としての系とは、この内的循環にほかならないのである<sup>xvii</sup>。

ここではゲシュタルトが全体であり構造であるということに加えて、平衡状態をもつという性質がつけ加えられる。何の平衡かといえ、その全体を構成する諸要素が相互に規定し合うことによって、互いに牽制し合い、等権利でそれら要素間において階層化されていないということである。こうしたゲシュタルトはその内的な統一性によって、外的影響力に抵抗する「一個の個体」となる。一個の個体であるということは、「その動的な構造の範囲外では意味を持たないが、その代わり内部の各点に対しては、その点の特性という絶対的特性が考えられなくなるまでにその特性をも規定してしまうような法則によって特徴づけ」<sup>xviii</sup>られるのである。ただしここで留意したいことはこれが物理的秩序におけるゲシュタルトであるという点であり、この平衡状態はそれがなんの留保もなしに目的として示されるような「良い形」とすることもできない。一つの平衡状態が実現され、個体となってしまうことで過去のものとなり、個体化の過程が忘却されてしまうことで、新たな実体論へと逆戻りする危険性がある。しかしゲシュタルトはそれが外部をもち、その外部と相互に作用するということによって、単に目的論に沿って組織化されるのではない。

#### 1-4 部分的全体

物理学においては、人間を介さず、自然界における物質とそこで働く力との関係性から現象へと接近することが試みられる。そこでは主観的なものは排され、諸々の法則によって現象を説明する。そして物理学においては、「絶対的特性をもった要素」、物質をより基本的な要素に還元する個性性が肯定される。こうした原子論的個性は一見するとゲシュタルトの概念とは折り合いが悪い。しかし、ケーラーは伝導体上の電荷の分布、ポテンシャルの差異、電流などについて、平衡した分布の状態や最大のエントロピーの状態をゲシュタルトとして捉えた。あるいは音楽のメロディを考えてみるならば、私たちは諸要素に還元されえない全体としてのメロディを感受することはできるが、しかしそこに現れる一つの音に注意を向けるといったことも可能なのである。つまり諸要素は全体として現れることでその個性を剥ぎ取られてしまうように思われるのだが、しかしそれぞれの要素が協同しなければその形を実現しえない以上、その個性も同時に保持されてなくてはならないはずである。メルロ＝ポンティはケーラーが古典物理学の中にゲシュタルトを見出している例を引きつつ、「すべての物理法則は、ある構造を表現しており、その構造のなかでのみ意味をもつ」と指摘する。例えば「物体の落下の法則は、地球の近辺に比較的安定した力の場が構成されているということを表し、またその法則の基底となる宇宙論的構造が持続する限りでしか妥当性をもちえない」<sup>33</sup>。ここで重要なことは、法則とはその法則に従うものを支配するものであるにも関わらず、それが絶対性ではなくその限界が示されているということである。このようなものとしての法則は、「単に比較的安定した幾つかの全体の特性」<sup>34</sup>でしかない。

したがってわれわれは、みずからの物理的世界像のなかに、幾つかの部分的全体とも言うべきものを導入せざるをえないわけであって、それがなければ法則ということもないであろうし、またそのような部分的全体こそが、上でゲシュタルトという言葉の意味した、まさにそのものなのである。法則を幾つか組み合わせてみれば、それまで比較的安定していた構造が消失して、予見不可能な特性をもった他の構造が出現するという事も起こりうるであろう<sup>35</sup>。

物理学における法則というものは、確かにその法則内で考えればその法則こそが特権的に諸事物を支配しているように見えるのだが、しかし実際には法則はそれが適用される具体的出来事から切り離されえない。その出来事において他の法則との関係も考慮にいれなければ、現象を解明することはできない。実験によって確認された結果が仮説として立てられた法則に従っているかの検証は、その実験固有の対象をなす条件とは異なる条件を計算に入れなければなら

ないからである。

法則や条件と帰結との直線の関係などから、相互に作用しあっている出来事、つまりゲシュタルトに送り返されることになるのであって、それらのものはゲシュタルトから遊離することはできないのである<sup>xiii</sup>。

これまでの議論では「ゲシュタルト」はある一つの物の形、つまりその内在的な性質に重点が置かれていた。しかしここにおいてゲシュタルトは確かに一つの構造として現れるものでありながらも、他の諸々のゲシュタルトとも相互に作用し合うものであるということが指摘されている。ゲシュタルトは部分に還元されえない全体として、部分に対して全体性の位置を占めているものの、それは当然ながらあらゆるものを包括するものではない。真に全てのものを含む集合は集合としての実質をなさないだろう。それが部分を含むもので、部分を集合の外部の部分と区別するからこそ、一つの全体としてまとまりうるのである。それゆえゲシュタルトは必然的に外部を持っている。

ここまでの議論で、「ゲシュタルト」概念がどのような含意を持つのか概観してきた。それは1) 部分に還元されえない全体をもち、2) 諸要素が協同する機能的な構造をもつ。そして諸要素の布置こそがそのゲシュタルトの実現に重要であることから、それが3) 比較的安定した平衡状態にあるということ、しかしゲシュタルトは4) 外部とも相関関係に置かれるために、それが予測不可能な新たな構造へと生まれ変わる可能性も含むものだということである。これらを受けて、次節では『行動の構造』における重要概念である「癒合的形態」、「可換的形態」、「象徴的形態」<sup>xiii</sup>について検討することで、「ゲシュタルト」概念を導入した意義と、この概念が「意識と自然」との関係にどのような変更をもたらしたのか検討する。

## 2. 行動のゲシュタルト

本節では「癒合的形態 ( les formes syncrétiques )」、「可換的形態 ( les formes amovibles )」、「象徴的形態 ( les formes symboliques )」について検討する。これら三つのカテゴリーは、メルロー＝ポンティも述べるように、動物の群ではなく、ある動物の行動が決して癒合的水準を越えないとか、象徴的形態以下にはならないといったようなものではないことに留意が必要である。

### 2-1 癒合的形態

「癒合的形態」の水準において、「行動は、あるいは状況のある抽象的側面に、あるいは極め

て特殊な刺激のある複合体に結びつく」と定義される。これは「本能的行動」とみなされている。ここではヒキガエルの行動が例として挙げられている。もしヒキガエルの前にガラスで隔ててミミズを置かならば、何度か失敗すれば学習し制止が発生しそうだが、ヒキガエルはミミズを捉えることに固執する。しかしヒキガエルに味の悪いアリを提示すれば、一度の経験で他の全てのアリに対しても制止を引き起こすということが起こる。ここで生じた制止についてメルロ＝ポンティは「本能のリズム」に依存していると考えている。つまりヒキガエルが反応しているのは、実験の刺激に対してなのではなく、「刺激が反射を起こすのは、それが固定した輪郭をもつ自然的活動の対象の一つに類似する限りであって、そしてそれが引き起こす反応も、現在の状況の物理的特殊性によってではなく、行動の生物学的法則によって規定される」<sup>xiv</sup>。つまり「癒合的形態」ということで述べられていることは、「どんな単純な行動も、決して孤立した対象に差し向けられるのではなく、多数の外的状況に依存する」<sup>xv</sup>ということであり、本能的行動といえども、それが刺激や状況との関係といった要素を含む構造を持つということである。

## 2-2 可換的形態

癒合的形態も諸々の関係への関わりを含んでいたが、しかしそれは具体的状況の実質にはまり込んでいる。種の本能の構成によっては決定されない行動の形態というものがあり、それが「可換的形態」である。ここには「学習」の契機が見られる。この形態は「信号 ( signal )」の概念によって解され、「信号」は「構造実現の素材から比較的独立している構造それ自体に基づく」<sup>xvi</sup>と定義される。

よく知られているケーラーのチンパンジーの実験のように、チンパンジーは直接には手の届かない目標を、道具を用いて自分の方へと引っ張ることができる。この道具の使用という出来事は一見すると、例えば木の枝に過ぎないものを、「ただ木から何らかの理由で折れて地面に落ちただけのもの」として認識するのではなく、「手の延長と見なし多様な出来事に応用しうるもの」としての認識を得ているかのように思われる。そのような認識を得ることはつまりチンパンジーが道具という自分そのものではないものに自己の運動を投入し、人間同様にパースペクティブの多様性を引き受け、自分の個別具体的な状況から身を離して思考するということを意味するのだろうか。直観的にそうではないだろうということは考えられるが、それでは人間が行うような行動とチンパンジーの行動との間にどのような差異があるのだろうか。この実験に見られるような行動と、後述する「象徴的形態」との間に決定的な差異がないのであれば、何かの拍子に道具を扱い始めたチンパンジーたちが文明を築いていてもおかしくないだろう。

ケーラーの実験では、すでに棒を道具として使用したことのあるチンパンジーが、手の届か



ない目標と、枝が容易に折れる枯れ木を前にして、檻の中に置かれている。すると個体により結果は異なるものの、不活動期を経て、枝を折りそれを目標を自分の手元に引き寄せるための道具として使用する個体が観察される。物理的実在としての木の枝がそれ自体で長さや幅などの特性をもち、刺激としての木の枝も同じ特性をもつただから、道具としての価値は等しいように思われる。しかしこの木の枝を道具とみなし棒の機能を枝に付与することは彼らには一挙にできることではないのである。また、重要なのは、少なくとも最初の実験において彼らが棒を使用するのは、棒と目標とが近くに置かれ、「視覚的に接触」する時だけだ。これらのことが示すことは、チンパンジーが「道具の客体的特性に則った行為を無関係の時間・空間のなかに展開することができず、彼が常に近い未来ないし空間的近さの影響力にさらされ、それが行為の構造を圧縮ないし解体させようとする」<sup>xvii</sup>ということである。

また別な実験の場合、果物を自分から一度遠ざけて迂回させる運動と、自分自身が迂回して果物を取りに行く運動について、これら二つは困難度が異なることが報告されている。ここで指摘されているのは、対象を迂回させるということは、自分の運動と対象の運動との間に対応関係を設定するということである。チンパンジーは自分を運動体の位置に置いて、自分自身を目標として見るができないのである。この対応関係、つまりパースペクティブを変更して象徴関係を設定するという水準は、「象徴的形態」のものとしてされている。

### 2-3 象徴的形態

「象徴的形態」の行動は、可換的形態の行動が「構造実現の素材から比較的独立している構造それ自体に基づく」ことに加えて、「構造がそれ以上に自由で、ある感覚から他の感覚へ移されうる」<sup>xviii</sup>だと定義される。

例えばピアニストの場合、楽譜に記載された音符と、その音符によって指示された音を鳴らすために鍵盤の所定の箇所を叩く運動との間に、本質的な相関関係というものはない。しかし、実際にはそれらの関係が上手く対応するからこそ、楽譜通りに演奏するとその意図された楽曲が演奏されるということになる。これらは、それぞれの構造の間に対応関係があり、同じ意味の核を共有するということによって、全体として内的であり必然的な関係として結びついている。この表現的な結びつきは、同一主題が多様な現れをしていると述べることができ、それはつまり「パースペクティブの多様性」を意味している。

こうした三つの構造を特徴づけることによって、メルロ＝ポンティは何も人間が動物に比べて高等な生物だ、ということを示そうとしているのではない。むしろ、上級の構造の独自性は、別な構造を説明するものではなく、また逆に下級の構造の独自性からは上級の構造を解することはできない。即自と対自という古典的な二分法に従って考えるならば、即自は物理的刺激、

具体的状況に依存するものであり、対自はそれらに依存せず、状況の意味とそれを看取する精神の働きに依存する。前者は外的なものの秩序として物理学的思考にとって透明であり、後者は出来事が常に意図に依存する内的なものの秩序として、反省にとって透明なものとなる。しかしメルロ＝ポンティは「行動」というものは、それが構造を持つ点においてこれら2つの秩序に位置しないと指摘する。行動は一連の物質的出来事のように、客観的な時間や空間の中に展開されるものではなく、学習の瞬間には、過去の行動の失敗を要約し経験の特殊な状況を現在に適用して問題を解決に導くことができる。またこうした事実が単に抽象化の能力を示しており、諸要素を思考によって統一し、一つの意味を作り出し、外界に意図を差し向けるのだということでもない。ここに見られるのは、有機体それぞれの種にとっての環境を扱う仕方であり、構成する能力ではないのである。

メルロ＝ポンティが「行動」概念を「ゲシュタルト」によって検討したのはこうした経験主義と主知主義との対立を回避するためである。それはただ諸部分に還元できないということを示すためではない。「癒合的形態」、「可換的形態」、「象徴的形態」の三つの区分によって示されたことは、行動が知能のレベルに応じて高水準になるということではなく、それらが独自の構造を持っており、階層化されているといっても階級として考えられているわけではないということである。また、とりわけ「可換的形態」の分析に多くの分量が割かれているように、「知能」や「意識」といった「人間的」と考えられているものの権利が再検討されているといえる。ケーラーの知能の定義は可換的形態の行動の出現が基準となっており、そのため道具を使用するチンパンジーは知的で高等な動物だ、ということになる。しかし可換的形態と象徴的形態の間を程度問題としてしまうことは、それらを区別するはずの問題を曖昧にしてしまう。

また、こうした区分により「意識」だけでなく「自然」の概念もまたそのままではられない。「互いに外的で因果関係によって結ばれた諸々の出来事」をはじめは指し示していたが、有機体の行動において、刺激と反応の関係というのは前者が原因で後者が結果という因果関係に置かれているのではない。「自然」もまた、有機体にとっての環境として、行動において有機体の外部に位置するだけのものではなく、その内部の構造とも接続している。

しかしなぜ「ゲシュタルト（形態）」だったのだろうか。こうしたことはゲシュタルト心理学による行動主義批判から出発したことを差し引いても、「構造」という概念を導入すればよかったのではないだろうか。次節ではこれまでの分析を踏まえた上で、「ゲシュタルト」概念導入の意義を検討してまとめたい。

### 3. 構造と形式

まず、ゲシュタルト概念の意義について、メルロ＝ポンティは何度か述べているが『行動の

構造』後半では次のように述べている。

われわれの出発点となった「ゲシュタルト」というものの中で深い意味をもっているのは、意味という観念よりもむしろ構造という観念である。つまり理念と存在との見分けがたい結合（*la jonction*）、素材がわれわれの面前で意味を持ち始めるような素材の偶発的な配列（*l'arrangement contingent*）、生まれ出ようとしている理解可能性（*l'intelligibilité à l'état naissant*）なのである<sup>xxx</sup>。

ゲシュタルトはこれまでも見てきたように、理念ではあったが、しかし個々の出来事を外的に規定するものではなく、諸々の現象や、有機体の行動の中に現れるものだった。そして刺激とはその刺激単体で反応を引き起こす原因なのではなく、反応行動という全体の一要素として、その全体の組織化の一契機となるものである。同じ刺激によって多様な反応が見られるということからもわかるように、刺激と反応の関係は因果関係によって結ばれているのではなく、その刺激の配列と有機体内部の構造との配列との関係によって、行動を実現する弁証法的関係にある。加えて重要なことは、この「ゲシュタルト」が外部を持つということと、そして外部と関係を持ちつつそれを弁証法的関係に巻き込んでいくということだ。それは「象徴的形態」において見られた構造と構造との対応関係を作り出す能力が、既存の形式に未知のものを組み込みつつも新たな布置の出現によって既存のものもそのままではいられないという創出の現象を生み出している。

こうした問題について、それでもやはり「構造」でよかったのではないだろうか、なぜ Gestalt の訳語である *forme* を採用したのか、という疑問は残る。メルロ＝ポンティは形式と内容の問題についても論じようとしていたのではないか。しかしそこに接近するためにはまず *forme* に含意される諸々の背景を中立化するため、ゲシュタルト心理学の文脈を用いることで、まずこの概念に「全体性」や「構造」の含意を持たせたと考えることができる。構造としての「ゲシュタルト」を持つ行動の観点からは、「ア・プリオリな形式」と「経験的内容」という二項対立は問題とならない。ア・プリオリなものとは、「一部分ずつ理解することができず、最初から分離不可能な一つの本質」であり、それに対してア・ポストリオリなものとは、「思考の面前で一つ一つ外的諸部分の寄せ集めから構成されるもの」<sup>xxx</sup>のことを指している。しかしこれまで見てきたように、行動の構造とは、分離不可能な全体を形作っていると同時に、諸部分を全体として組織化することで構成されるものである。

また、晩年のメルロ＝ポンティは『見えるものと見えないもの』に収められている研究ノートにおいて、再び「ゲシュタルト」の概念を再検討している。そこでは、「部分の総和に還元されない全体」という定義はあくまで否定的で内的な定義にすぎないとして、「一つの配分

( distribution ) 原理であり、ある等価体系の軸であり、細分化された諸現象がその現れであるようなあるもの ( *Etwas* ) なのだ」と述べている<sup>xxi</sup>。そして「ゲシュタルトとは超越である」という命題によって、『行動の構造』において述べられていた組織化が、『知覚の現象学』における「超越」の運動と結び付けられることになる。そしてそれを踏まえた上で検討されねばならないことは、『知覚の現象学』における「プレグナンス」の問題である。なぜなら、そこでの「プレグナンス」とはただ「良い形」へと向かう傾向向ののではなく、事物の内在的布置による偶然性を含んだ形態化作用であって、そしてこの「プレグナンス」は超越の運動としての表現において理解されるものだからである。そこで生じている超越の運動こそ、メルロ＝ポンティが常に意識していた主知主義と経験主義の二項対立の乗り越えの中核をなす「形式と内容の弁証法」とみなすことができるだろう。

i 國領佳樹『『行動の構造』——行動主義批判と内観について』（松葉祥一、本郷均、廣瀬浩司編『メルロ＝ポンティ読本』法政大学出版局、2018年、p.41）

ii 「構造ないしはゲシュタルト」という言い方がなされるように、差し当たり「構造」と「ゲシュタルト」を同一の概念として扱っているものとする。

iii 『メルロ＝ポンティ読本』p.43

iv M.メルロ＝ポンティ『目と精神』滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、1966年/2010年、p.32.

v 同書、p.64.

vi Renaud Barbaras, “MERLEAU-PONTY ET LA PSYCHOLOGIE DE LA FORME”, *Les Études philosophiques*, No. 2, Merleau-Ponty : Le philosophe et les sciences humaines (Avril Juin 2001), pp. 151-163. Published by : Presses Universitaires de France, <https://www.jstor.org/stable/20849396>

vii M. Merleau-Ponty, *La structure du comportement*, Presses universitaires de France, « Bibliothèque de Philosophie contemporaine », 1942/2013 [『行動の構造』木田元・滝浦静雄訳、みすず書房、1964年]。以降、SCと略す。引用は基本的に邦訳書に従ったが、用語の統一のため一部筆者が訳出した。SC, 1. 邦訳 p.21.

viii 國領 (2018)、p.33.

ix SC, 3. 邦訳 p.23. 「行動」に焦点が絞られた心理学の背景は國領 (2018) に詳しい。

x 『行動の構造』では基本的に Gestalt の語はあまり使われず、フランス語に訳された forme として現れる。邦訳では「形態」や「ゲシュタルト」と訳すと注がつけられているが、文脈により (とりわけカントやヘーゲルが登場する箇所では) 「形式」と訳されている。また、厳密に一致しないが configuration が「形態」や「形態化」と訳出されている箇所もある。確かに「ゲシュタルトは布置 (une configuration) である」と記述されている箇所もあるが、「布置」はむしろゲシュタルトの内的秩序を示すものであり、完全に forme と同一視して良いかは別途検討を要するだろう。

xi SC, 28. 邦訳 p.46.

xii SC, 40. 邦訳 p.58.

xiii SC, 41. 邦訳 p.58.

xiv *Ibid.*

xv 厳密に言えば2つの音に挟まれた間の休符は1つの音と言うべきであり、その意味では最低でも3つ以上の音が必要になることになる。あるいは1つの長音でも伸ばしている間に高低差をつけることによってそこにリズムは生じる。しかし記譜上の単音を音の最小単位の基準として良いのかはリズムにおいて問題となるだろう。

xvi SC, 66. 邦訳 p.81.

xvii SC, 207. 邦訳 p.204.

xviii SC, 207. 邦訳 p.205.

xix SC, 209. 邦訳 p.205.

xx *Ibid.*

xxi *Ibid.*

xxii SC, 211. 邦訳 p.207.

xxiii これまで *forme* を「ゲシュタルト」と訳出したが、「癒合的形態」、「可換的形態」、「象徴的形態」については定訳に則り「形態」と表記する。

xxiv SC, 160. 邦訳 p.162.

xxv *Ibid.*

xxvi SC, 161. 邦訳 p.163.

xxvii SC, 174. 邦訳 p.174.

xxviii SC, 183. 邦訳 p.181.

xxix SC, 313. 邦訳 p.307.

xxx SC, 259. 邦訳 p.254. こうした問題は「人間的秩序」の意識の問題として捉えられているが、ここでは意識だけでなく「行動」一般において、この二項対立が適用できないということを考えたい。

xxxi *Le visible et l'invisible suivi de Notes de travail*, Gallimard, 1964. p.255.